



中河与一年表

明治三〇（1897）年

二月二八日、東京上野に於いて、父与吉郎、母多美の長男として誕生。五弟一妹であった。

明治三六（1903）年 六歳

母の郷里、岡山県赤磐郡瀨瀬村大内（現、瀬戸町）近重方に行き、大内小学校卒業までこの山村の祖父母のもとで過ごす。九歳の頃、歳上の少女から交合の誘惑を受けた。

明治四三（1910）年 一三歳

香川県丸亀中学校に入学。

大正四（1915）年 一八歳

同中学校を卒業。日置流弓術師範平井錦二郎茂則より免許の目録を受く。この頃より絵画に興味をもち、しばしば写生に行く。与謝野晶子、シェレー、バイロン、谷崎潤一郎、大杉栄などを乱読。『香川新報』の新年懸賞小説に中河哀秋のペンネームにて投稿、掲載される。

大正五（1916）年 一九歳

京都市七条平安中学正門前にて第四郎と共に生活し、しばしばスケッチに外出する。また終日短歌の制作に熱中し、北原白秋に選を乞ふ。白秋主宰の『ザンボア』一月復活号に朝江彩介のペンネームにて「京の街」（九首）を投稿。近所にあった夜学校「漢数学館」にて数学を担当する。この年の終り頃より潔癖症はなはだしく遂に狂人に近く、静養のため坂出町に帰る。

大正七（1918）年 二一歳

五月、母の計らいで上京、本郷の赤心館に下宿。岡田三郎助の「本郷洋画研究所」に通う。

大正八（1918）年 二二歳

三月、早稲田大学予科文学部に入学。

大正九（1920）年 二三歳

四月二日、同郷の紙問屋林卯吉の三女幹子と結婚、京都神楽岡にて挙式。幹子は津田女子英学塾に在学中で、学生結婚のはしりであった。牛込区源兵衛の大工の部屋を借りて暫く住む。のち牛込区原町に移る。

大正一〇（1921）年 二四歳

一月一五日、長男真一誕生。三月、予科文学部を卒業、卒業論文は「サミエル・リチャードソン」。四月、早稲田大学英文本科に入学。六月、処女作「悩ましい妄想」（のちに「赤い薔薇」と改題）を『新公論』に発表し、初めて稿料を得た。秋、幹子と共に白秋を小田原の「みみづ

くの家」に訪問、一泊して連吟を試みた。

大正一一（1922）年 二五歳

一〇月、幹子、短歌雑誌『ごぎやう』創刊。一一月頃より再び潔癖と幻覚に悩まされる日が多く、早稲田大学を中途退学する。これはなお十数年に及び、その結果、交友に支障をきたすことが多かった。

歌集『光る波』、上田屋書店、四月。

「踊」、『早稲田文学』七月。

「リチャードソンに就いて」、『ごぎやう』一〇月。

大正一二（1923）年 二六歳

一月、村野次郎らと共に歌誌『香蘭』を創刊。今西成美の紹介にて金星堂編集部勤務、両親の仕送りを謝絶する。三月一四日、長女女礼誕生。同郷の菊池寛のつてで『文藝春秋』に小説を書く。間もなく『文藝春秋』の同人となる。九月一日、関東大震災にあい、麹町区山元町の家を焼け出され、四谷見附の学習院に避難し、千駄ヶ谷に転じ、更に東中野塔に移る。一一月より『文藝春秋』の編集に従事する。

「或る新婚者」（のちに「新婚者」と改題）、『文藝春秋』五月。

「祖母」、『文藝春秋』七月。

「或る心中の話」（のちに「海に開く窓」と改題）、『文藝春秋』一一月。

「蝙蝠傘の日記」、『黒潮』一一月。

大正一三（1924）年 二七歳

四月、北原白秋、古泉千樫、釈迢空らの主宰する『日光』創刊、同人になる。七月、金星堂の編集部をやめる。一〇月、伊藤貴麿、石浜金作、川端康成、加宮貴一、片岡鉄兵、横光利一、今東光、佐佐木茂索、佐々木味津三、十一谷義三郎、菅忠雄、諏訪三郎、鈴木彦次郎ら一四名同人となり、『文芸時代』を金星堂より創刊（昭和二年五月まで全三二号）。『年刊歌集』関根書店刊の「山海集」に二二首掲載。戯曲「鷺鳥か家鴨か」が長田秀雄の推薦により、尾上鯉三郎、伊三郎、蟹十郎らの創作座によって日本橋劇場に上演される。この頃より林武と知る。

「祝」、『新思潮』二月。

「鬢」、『文章倶楽部』三月。

「木枯の日」、『新潮』三月。

「短編小説論」、『文藝春秋』三月。

「ビスケットと裁判」、『文藝春秋』五月。

「じゅんでんごふ」、『新潮』六月。

「父親の話」、『日光』六月。

「次の時代」、『日光』七月。

「清めの布と希望」、『新小説』九月。

「湖水の近くで」、『東京朝日新聞』八月二三日。

「庭を広げる」、『現代文芸』九月。

「運のいい旅人」、『少女星』九月。

「義足」、『文藝春秋』一〇月。

「新らしい病気と文学」、『文芸時代』一〇月。

「刺繍せられた野菜」、『文芸時代』十一月。

「墓」、『文芸時代』十一月。

「高き存在への嗅覚」、『文芸時代』十一月。

「鷺鳥か家鴨か」、『演劇新潮』十一月。

「五月の夜」、『文壇』十一月。

「未亡人と狼」、『文芸の先駆』一二月。

大正一四（1925）年 二八歳

五月二八日、次女まり子生れる。九月、峰谷公之介、矢野文夫らと「一幕物劇場」を創立、構光利一の「おそろしき花」、佐藤春夫の「誰そがれ」、ストリンドベリーの「貸と借」を上演したが、資金難のため解散。滝田禎陰による抜擢で『中央公論』に小説を発表する。一〇月、東中野の佐治少将の本邸を借り住む。

「海浜挿話」、初出不明。

「首をちぎった話」、『週刊朝日』一月一日。

「無名作家と狼」、『文藝春秋』一月。

「彼の憂鬱」、『新潮』一月。

「親切」、『文芸時代』二月。

「赤き城門」（のち「金色の城門」と改題）、『文芸時代』三月。

「ことのわからぬ批評家」、『新潮』三月。

「午前の殺人」、『女性』三月。

「棺をかつぐ音」、『文藝春秋』四月。

「氷る舞踏場」、『新潮』五月。

『午前の殺人』、新潮社、六月。

「愉快なる発見—或る偏執病者の手紙」、『文芸時代』八月。

「気軽な発見」、『文藝春秋』八月。

「或る時代の心持」、『早稲田文学』八月。

「地獄」、『中央公論』九月。

「黒い影」（のち「黒い幻」と改題）、『文藝春秋』九月。

「狂気した生活より」、『文章倶楽部』九月。

「厄日」、『新小説』十一月。

「最後の装飾」、『婦人倶楽部』十一月。

昭和元（1926）年 二九歳

八月、諏訪丸にて神戸出帆、中国に遊び、上海、蘇州、杭州、南京と廻る。上海では田漢と親交を結んだ。秋、佐伯祐三との交遊始まる。

「肉親の賦」、『中央公論』一月。

「道化役者の記」、『太陽』一月。

「希望」、『文芸時報』一月。

「乳」、『キング』二月。

「心の影」、『文芸時代』二月。

「つゝましき祝宴」、『文藝春秋』四月。

「見知らぬ海景」、『女性』四月。

「恐ろしき私」、『新潮』四月。

「生きてゐる」、『文章往来』四月。

「孤客」、『文芸時代』四月。

翻訳「X化せられた章」（アラン・ポー）、『辻馬車』五月。

『氷る舞踏場』、金星堂、六月。

「或る女の話」、『文芸行動』六月。

「横光利一氏の印象」、『新潮』六月。

「自画像」、『虚無思想』六月。

「眼鏡をかけてくれ」、『文芸時代』六月。

「海に沈む都から」、『新潮』九月。

「船窓小戯」、『近代風景』一一月。

昭和二（1927）年 三〇歳

三月、池谷信三郎、稲垣足穂、片岡鉄兵、川端康成、久野豊彦、岸田国土、十一谷義三郎ら二七名と同人雑誌『手帖』創刊（一一月まで全九号）、九月号に佐伯祐三のスケッチ「中河与一氏の顔」が掲載される。三月には、中国の劇作家田漢が、雷震天鳴少将と共に中河邸訪問。五月二〇日、長女女礼（四歳）を失う。悲しみのため東中野の家をたたみ、八月、九月を軽井沢にて過す。この時池谷信三郎と共にオートバイの練習をする。

「花を持てる肖像」、『若草』一月。

「天の門」、『中央公論』二月。

「恋がたき」、『文藝春秋』二月。

「的的的手紙」、『不同調』二月。

「秋風の宿」、『新潮』三月。

「性的圧迫の世界」、『手帖』三月。

「孫逸仙の友」、『文芸時代』四月。

「時代読本—男性中心時代、女性中心時代—」、『手帖』四月。

「私の好きな短歌」、『若草』四月。

「芥川氏の首」、『手帖』五月。
「フェニミズム」、『手帖』六月。
「芸術による派」、『創作月刊』六月。
「船の中で」、『随筆』六月。
『恐ろしき私』、改造社、六月。
「夜の幻想曲」、『若草』七月。
「愚かなる父」、『手帖』七月。
「博齒なる馬車」、『改造』八月。
「秋粧」、『手帖』九月。
「軽井沢的秋」、『手帖』一〇月。
「瓢々として」、『手帖』十一月。
「海路歷程」、『女性』一二月。
「夢と或る夫婦」、『新潮』一二月。
「靴下だけの女」、『週刊朝日』一二月一八日。
「うるさい」、『読売新聞』一二月五日。
「南方憧憬」、『時事新報』一二月六日。
「蘇州の旅」、『東京日日新聞』一二月一九日。

昭和三（1928）年 三一歳

形式主義文学論争が始まる。

「白樺をたいて」、『現代』一月。
「盛装せるミス・ナンセル」、『若草』一月。
「昔の絵」、『新潮』二月。
「苦力の賦」、『文芸時代』二月。
「真情」、『サンデー毎日』二月。
「七宝傘経」（のち「赤と白」と改題）、『創作月刊』三月。
「愛の技術家」、『文芸倶楽部』三月。
「過去には何も無い」、『文芸倶楽部』六月。
「芸術による派」、『創作月刊』六月。
「鞭をもつた女」、『中央公論』六月。
「女礼」、『文藝春秋』七月。
「支那の風呂」、『現代』七月。
「齒痛荘寸記」、『文藝春秋』七月。
「広東入港」、『時事新報』七月二二～二六日。
「頭の中の雑草」、『読売新聞』七月二五、二七、二八日。
「夜虹」、『若草』八月。
「萎れた花」、『婦人倶楽部』九月。

「茅屋記」、『創作月刊』一〇月。

「早速抗議『文壇徒然』へ」、『不同調』一〇月。

「モデルの立場」、『文章倶楽部』十一月。

「形式主義文学の一端」、『朝日新聞』十一月二二～二四日。

「匿れる恋人」、『現代』一二月。

「形式と内容とは対立しない」、『読売新聞』一二月一日。

「形式主義理論の方向」、『読売新聞』一二月一〇日。

昭和四（1929）年 三二歳

形式主義文学論争が激化。三女郷子誕生。

「印度王宮図」、『文藝春秋』一月。

「野の花嫁」、『令女界』一月。

「形式主義の理論は動的である」、『東京日日新聞』一月二三～二五日。

「傷心賦」、『婦女界』二月。

「横光例話集」、『新潮』二月。

「鼻歌による形式主義理論の発展」、『文藝春秋』二月。

「形式主義理論の一端」、『創作月刊』二月。

「恋とザンゲ」、『サンデー毎日』八月。

「形式主義の理論は生活的根拠を持つ」、『東京日日新聞』八月六日。

「形式主義によつて分離せられる新旧」、『読売新聞』八月一九、二〇日。

「形式主義の効用」、『創作月刊』三月。

「形式主義に関する諸問題」、『文芸都市』四月。

「科学上のテクニツクと形式主義」、『創作月刊』四月。

「バルト海の滑走場」、『若草』五月。

「平面的相互作用の否定」、『創作月刊』五月。

「赤い復讐」（のち「肉体の暴風」と改題）、『中央公論』六月。

「唯物的形式主義の立場」、『文芸都市』六月。

「左翼文学論の動揺」、『東京日日新聞』六月四日。

「傾ける広東」、『近代生活』八月。

「イズム・イズム」、『大阪朝日新聞』八月二九日。

「熱海から箱根」、『サンデー毎日』八月二五日。

「悲しき晴衣裳」、『婦人倶楽部』九月。

「芸術混乱」、『読売新聞』九月三、一一日。

「ロメオとジュリエット」、『婦人サロン』十一月。

「マルセイユの太陽」、『文学時代』一二月。

昭和五（1930）年 三三歳

二月、座談会「現代文芸の相互批判」（『読売新聞』）にて討論に参加。三月、座談会「芸術派とプロ派の討論会」（『新潮』）にて討論に参加。三月、文化学院講師となる。七月、伊藤整、井上友一郎、十和田操、奥村五十嵐、上林暁、田村泰次郎、中島直人、山下三郎、丸岡明、福田清人、近藤一郎、雨宮力、榊山潤、永松定、北村透馬、庄野誠一、積亮一らを同人として、雑誌『新科学的』（昭和八年二月まで全三二号）を創刊主宰する。六月、池谷信三郎と仙台の東北帝大にゆき文学部で形式主義について講演。一二月三一日、横浜より筑後丸にて南洋方面の旅に出発。小笠麻、サイパン、テニアンを廻り、翌年一月二一日帰国。

『形式主義芸術論』、新潮社、一月。

「スペイン金貨」、『若草』一月。

「ショール奇譚」、『少女世界』一月。

「男爵未亡人」、『週刊朝日』一月。

「イデオロギーから芸術は出来ない」、『文芸レビュー』二月。

「自己を語る」、『文学時代』二月。

「機械と人間」、『モダンTOKIO円舞曲』收、春陽堂、三月。

「アルゼンチンの女」、『文藝春秋』四月。

「ブルカマル」、『文学時代』四月。

「急行電車の算術」、『文学時代』四月。

『フォルマリズム芸術論』、天人社、五月。

『R汽船の壮図』、新潮社、五月。

「蒔かれた人種」、『新潮』六月。

「成功と失敗」、『現代』六月。

「鼻歌による形式主義論の一面」、『文芸評論集』收、新潮社、六月。

「宣言」「形態万覚帳（一）」、『新科学的（文芸）』七月。

「形態万覚帳（二）」、『新科学的』八月。

「舞踏教師と花」、『新潮』八月。

「苛斂誅求」、『文学時代』八月。

「形態万覚帳（三）」、『新科学的』九月。

「数式の這入った恋愛詩」、『科学画報』九月。

「形態万覚帳（四）」、『新科学的』一〇月。

「二千六百八十二哩」、『改造』一二月。

「ピオレ商会に現われた人物」、『新潮』一二月。

昭和六（1931）年 三四歳

一一月、徳富蘇峰の推奨を受ける。一一月六日、次男原理誕生。

「病的な積極」、『新文学研究』一月。

「『アジアの嵐』後日譚」、『新潮』一月。

「軍艦を訪問して」、『新科学的』二月。

「南方紀行」、『改造』二月。
「大森林州」、『文藝春秋』二月。
『ホテルQ』、赤炉閣書房、三月。
「久野豊彦」、『新潮』四月。
「モンテ・ビデオの女」、『新潮』四月。
「純粹夫人」、『文学時代』四月。
「断片語（一）」、『新科学的』、六月。
「科学、芸術、作品」、『新潮』六月。
「断片語（二）」、『新科学的』七月。
「狂恋のカナカ娘」、『婦人公論』七月。
「南からきた女」、『家庭』七月。
「文学の振幅」、『新文学研究』七月。
「ポケット猿」、『サンデー毎日』七月二日。
「断片語（三）」、『新科学的』八月。
「断片語（四）—『レドモア島より』『回想のセザンヌ』—」、『新科学的』九月。
「狼子野心」、『大阪毎日新聞』、九月（日付不明）。
「ゴルフ（一名鏡に這入る女）」、『文藝春秋』一〇月。
「シヤモ先生の肖像」、『週刊朝日』一〇月（日付不明）。
「断片語（五）—果物随筆、新科学的—」、『新科学的』十一月。
「薔薇」、『新潮』十一月。
『海路歷程』、第一書房、十一月。
「断片語（六）」、『新科学的』一二月。

昭和七（1932）年

二月一二日、胃潰瘍を発病、二二日危篤状態に陥り両親上京する。島菌博士の診療、中学時代よりの親友香川昇三博士の寝食を絶する手当により漸やく回復、病後伊東に温泉つきの家を借りて二ヶ月程療養する。病後は鬱々たる気持で過す日が多く、この年、かねて私淑してゐたフランスの画家ラウル・デュフィ宛に、「鏡に這入る女」（一名「ゴルフ」）の梗概と石井柏亭の紹介状を添え装幀を依頼する。

「『文芸時代』雑感」、『新文芸時代』一月。
「同じ緯度を走る船」、『新科学的』二月。
「病中録」、『新科学的』六月。
「『左手神聖』の序」、『新科学的』七月。
「気候の流行」、『文学時代』七月。
「アルゼンチン二人女」、『現代』八月。
「一筆」、『新科学的』九月。
「日本クルーソー記」、『雄弁』九月。

「或る一日」、『新科学的』一〇月。

「手法」（のち「ウソの楽園」と改題）、『日本国民』一〇月。

「性格のある家」、『新潮』一〇月。

『左手神聖』、第一書房、一〇月。

「机の上の本」、『新科学的』十一月。

「満月」、『文藝春秋』十一月。

「愛」、『三越』十一月。

「黄昏の人」、『新潮』十二月。

「年齢」、『婦人サロン』十二月。

昭和八（1933）年 三六歳。

二月、『新科学的』終刊、七月に『翰林』に改称して創刊。三月、一年間の契約にて日本大学芸術科の講師となる。機関紙「芸術科」の顧問となり、部員であった十返肇、糸屋鎌吉らを知る。

「薔薇の月曜日」、『若草』四月。

「藹たき花」、『東京・大阪朝日新聞』、五月八日～六月二二日。

「鬚」、『文藝春秋』七月。

「秘帖」（短歌一五首・連載の一）、『翰林』七月。

「密月船で逢った女」、『婦人公論』八月。

「秘帖（二）」（短歌一〇首）、『翰林』九月。

「軌跡」（のち「懊惱記」と改題）、『新潮』九月。

「秘帖（三）」（短歌一八首）、『翰林』一〇月。

「秘帖（四）」（短歌八首）、『翰林』十一月。

「結婚」、『週刊朝日』十一月一九日。

「万覚帖」、『翰林』十二月。

「三連符」、『中央公論』十二月。

「友達同志」、『文芸通信』十二月。

『藹たき花』、第一書房、十二月。

昭和九（1934）年 三七歳

偶然文学論を展開していく。三月、座談会「小説に就いての座談会」（『行動』）に出席。五月、さきに依頼してゐたラウル・デュフィの装幀画、在仏の松尾邦之助の配慮により、パリより帰国した野村義太郎によってとどけられる。十一月、「文学の指導性座談会」（『行動』）に出席。十二月、川柳久良岐より偶然論に寄せる書幅を贈られる。

「レドモア島誌」、『文藝春秋』一月。

「愛情」、『若草』一月。

「池谷信三郎のこと」、『翰林』二月。

「脱走記」、『文芸』二月。
「秘帖」（短歌一三首）、『行動』二月。
「池谷信三郎を悼む」、『文藝春秋』二月。
「偶然の毛毬」、『東京朝日新聞』二月二八日。
「万覚帖一春琴抄私見一」、『翰林』三月。
「窈窕」、『新潮』三月。
「万覚帖一リアリズムの問題一」、『翰林』四月。
「天符」、『改造』四月。
「直木三十五」、『行動』四月。
「文章構成の技術」、『日本現代文章講座3』厚生閣、四月。
「たかき国」、『作品』四月。
「万覚帖一絵の展覧会一」、『翰林』五月。
『レドモア島誌』、改造社、五月。
『秘帖』、書物展望社、五月。
「万覚帖」、『翰林』六月。
「追つかける男」、『文藝春秋』六月。
「尾崎士郎」、『行動』六月。
「小説礼讃」、『東京朝日新聞』六月八～一〇日。
「形式と内容」、『日本現代文章講座4』收、厚生閣、六月。
「『秘帖』余録」、『日本短歌』八月。
「剽窃問題に答ふ」、『文芸通信』八月。
「文章構成学」、『日本現代文章講座1』、厚生閣、八月。
「船の友達」、『翰林』九月。
「真実とは」、『読売新聞』九月一四日。
「万覚帖」、『翰林』一〇月。
「文学を蘇生せしめよ」、『行動』一〇月。
『ゴルフ』、昭和書房、一〇月。
「万覚帖」、『翰林』十一月。
「偶然論摘要」、『国語教育』十一月。
「確率概念の革命」、『時事新報』十一月七日。
「サイコロ必然」、『読売新聞』十一月一七日。
「万覚帖」、『翰林』十二月。
「偶然とリアリズム」、『都新聞』十二月一〇日。
「マラルメの言葉」、『大阪夕刊新聞』十二月一三日。
『熱帯紀行』、竹村書房、十二月。

この頃より時々藤田嗣治を訪問。五月、岡本一平・かの子夫妻、萩原朔太郎、福田清人、保田与重郎、四賀光子、若山喜志子と共に日光に遊ぶ。この頃より偶然文学論が白熱化し、多くの評論を発表。一〇月、賀川豊彦渡米の告別説教に於て偶然論への賛意を表明。

「日蘭商会」、『行動』一月。

「心中始末記」、『オール読物』一月。

「純文学の敵は何か」、『新潮』一月。

「円形四ッ辻」、『文藝春秋』二月。

「偶然の毛毯」、『東京朝日新聞』二月九～一一日。

「偶然の毛毯（覚書）」、『翰林』三月。

『博歯になる馬車』、民族社、三月。

「セミラミス女王」、『若草』四月。

「偶然に関するノート」、『翰林』四月。

「偶然への頌歌」、『大阪朝日新聞』五月八～一〇日。

「偶然への頌歌—岡邦雄氏の批評に答へる—」、『翰林』六月。

「人間的牽引力」、『大阪毎日新聞』六月二七日。

「偶然論序章」、『翰林』七月。

「偶然文学論」、『新潮』七月。

「偶然論への反撃」、『読売新聞』八月一～三日。

「方法論に関して」（のち「偶然論に関して」と改題）、『東京朝日新聞』八月一五日。

「朱鞘老人に物申す」、『読売新聞』八月一三日。

「偶然論に関連して」、『翰林』九月。

「無限の可能性について」、『経済往来』九月。

「三連符（船・短歌・病気）」、『翰林』一〇月。

「偶然論問答—偶然論」、『文芸』一〇月。

『偶然と文学』、第一書房、一〇月。

「確率概念の訂正」、『翰林』十一月。

「三連符」、『時事新報』十一月七～九日。

「『瘤』を読んで」、『翰林』十二月。

「愛恋無限」、『東京・大阪朝日新聞』一〇年十二月一〇～一一年四月二〇日。

昭和一一（1936）年 三九歳

一月末より衰弱はなはだしく、二月中旬まで慶応病院に入院し輸血一六〇グラムを幹子より受ける。前年より連載中の「愛恋無限」を四月二〇日をもって完結。日活及び新興キネマと「愛恋無限」の映画化の契約が成立、撮影所を訪問し俳優たちと記念写真をとるものの、両者とも契約を履行せず、映画は実現しなかった。近くの沙弥島に幾度か遊び、人麿の遺跡を求め、人麿碑建立を決意。

「マラルメの言葉—香坂氏に一」、『翰林』一月。

「夢に來し叔父」、「偶然論の優位—岡邦雄氏の迷論—」、「『翰林』二月。

「作者有罪」、「『作品』三月。

「新聞小説覚書」、「『翰林』四月。

「競馬と僕の小説」、「『翰林』五月。

『愛恋無限』、第一書房、五月。

「偶然論三題」、「『作品』七月。

「この頃の感想」、「『翰林』七月。

「万葉ギリシア」、初出不明。

『文芸不断帖』、人文書院、七月。

「はち」、「『若草』八月。

「万葉集と瀬戸内海」、「『翰林』九月。

「新しき糧」、「『新潮』一〇月。

「万葉への思慕」、「『文芸懇談会』、一一月。

「牛島風景」、「『コギト』一一月。

「万葉集三首」、「『作品』一二月。

昭和一二（1937）年 四〇歳

一月、萩原朔太郎、佐藤春夫らと共に『日本浪漫派』同人に加わる。座談会「時代と文芸思想の行くべき道」（『読売新聞』）に参加。九月二五日、「天の夕顔」脱稿。一一月一三日、「愛恋無限」に対し第一回北村透谷記念文学賞として、賞牌と金一〇〇〇円を受ける。賞金は派遣軍傷病兵のために献金する。

「雲中先生録事」、「『文芸』一月。

「人麿歌集四首」、「『作品』一月。

「保田与重郎」、「『日本浪漫派』一月。

「カシミールの美女」（のち「カシミールの美貌」と改題）、「『週刊朝日』一月。

「民族文化主義」、「『日本浪漫派』三月。

「人麿並びに人麿歌集の歌」、「『コギト』五月。

「万葉集七十三首」、「『文芸懇談会』七月。

「憶良・旅人・赤人」、「『コギト』七月。

『万葉の精神』、千倉書房、七月。

「漣子と男達」（のち「求道女」と改題）、「『いのち』一〇月。

「ドイツへの関心その他」、「『新潮』一一月。

『ゴルフ』（「泉郷奇譚」収録）、版画荘文庫、一一月。

「歌人に与へる書」、「『日本短歌』一一月。

昭和一三（1938）年 四一歳

「天の夕顔」が、永井荷風よりゲーテの「ウェルテル」、ミュッセの「世紀の児の告白」に匹

敵すべきものとの推奨の書簡を受け深く感動する。六月一五日、内相安井英二より『日本の理想』についての感想の書簡を受け、一七日、末広亭に招かれる。九月、東京会館にて受賞記念会を催す。

「天の夕顔」、『日本評論』一月。

「出版時評」、『作品』一月。

「氷海の情熱」、『雄弁』三～五月。

「続歌人に与へる書」、『日本短歌』三月。

「大連にゆく女」、『週刊朝日』四月（日付不詳）。

「昭和の精神とは何か」、『新潮』四月。

『日本の理想』、白水社、五月。

「北京の女」、『現代』六月。

「帰一する根本義」、『週刊朝日』六月一二日。

「続々歌人に与へる書」、『日本短歌』八月。

「ふるさと」、『随筆』九月。

「理想主義と文学」、『ごきやう』九月。

「『青墓の処女』をよみて」、『作品』九月。

『天の夕顔』初版、三和書房、九月。

『惜しみなく愛は与ふ』、三和書房、九月。

「短歌革新の問題」、『文芸文化』十一月。

「歌人に与へる書」、『短歌研究』十一月。

「詩集西康省」、『コギト』十一月。

昭和一四（1939）年 四二歳

六月二日、母多美、六六歳にて他界。そのため五月二九日、坂出に帰る。九月一日、萩原朔太郎、芳賀檀、保田与重郎、西村孝次、十返肇、福田清人、丸山薫、小高根二郎、田中克己、蔵原伸二郎、檀一雄、伊東静雄、神保光太郎らと共に『文芸世紀』を創刊（昭和二一年一月まで全六五号）、一九年七月号より三島由紀夫加わる。一二月、厚生省諮問機関の労務管理調査委員となる。

「われ誓ひし人」、『婦女界』一～一二月。

「文学伝統の問題」、『文芸文化』一月。

『全体主義の構想』、東京作品社、二月。

「風雲窟の禅門」、『日本評論』三月。

「文芸勃興の空気」、『作品』三月。

「如何なる歌を選ぶか—歌人に与へる書・第六」、『日本短歌』四月。

「相聞四十百選」、『文芸文化』五月。

「大いなる転回」、『ごきやう』七月。

「西洋と東洋を包摂するものとしての日本」、『文芸世紀』八月。

「相聞歌の問題」、『日本短歌』八月。

「鏡花先生のこと」、『文芸世紀』一〇月。

「予言（覚書）」、『文芸世紀』十一月。

「相聞の発想」、『日本短歌』十一月。

「子規における古今集」、『文芸文化』十一月。

昭和一五（1940）年 四三歳

五月一四日、新京にあった満州国立建国大学の招きで、一週間日本文芸を講義し、帰途、承德、胡北口、北京、青島、大連を廻って帰京する。九月七日、「チチキトク」の電報により、八日、帰郷、脳溢血で昏睡状態であったが十一日、意識回復、一二日、帰京した。

「新らしき発想（覚書）」、『文芸世紀』一月。

「後鳥羽院」、『文芸世紀』二月。

「賦」、『コギト』二月。

「支那並びに世界への文化的使命」、『文芸世紀』三月。

『愛の約束』、人文書院、三月。

「永遠なるもの」、初出不明。

『われ誓ひし人』、第一書房、三月。

「近代思想と愛の意味—相聞歌に関連して—」、『文芸世紀』五月。

「美とは何であるか—散文詩風に—」、『文芸世紀』六月。

「『生けるパスカル』と精神分析」、『随筆』七月。

「個性といふこと」、『文芸世紀』八月。

「和歌形式の意味」、『文芸世紀』九月。

「満支旅行のノート—無の思想と風土」、『文芸世紀』一〇月。

「歌壇の新人に与ふ」、『日本短歌』一〇月。

「満支旅行のノート（二）—思想と殖民」、『文芸世紀』十一月。

「愛の意味と文化の体制」、『文芸世紀』一二月。

『熱帯圏』（『熱帯紀行』改訂版）、第一書房、一二月。

昭和一六（1941）年 四四歳

四月一日、朝、三回日の発作にて父与吾郎、六九歳にて死去。一二月一七日、肺炎を起し、順天堂病院に入院する。

「ひもろぎ捧持（随想）」、『文芸世紀』一月。

「ドイツのとロシア的」、『文芸世紀』二月。

「再び歌壇の新人に与ふ」、『日本短歌』二月。

「生活的関心の開放」、『文芸世紀』三月。

「風流隠士」、『文芸世紀』四月。

「文芸あれこれ」、『文芸』四月。

「戦と交友に於ける判断」、『文芸世紀』六月。

『愛は惜しみなく与ふ』、東水社、六月。

「日本と全体主義」、『文芸世紀』七月。

「日野俊基卿」、『文芸世紀』八月。

「美に於ける発想」、『文芸世紀』九月。

『美しき青春』（『藹たき花』の改題）、第一書房、九月。

「三十一字形式に於ける民族的直観」、『日本短歌』九月。

「民族主義の意味」、『文芸世紀』十一月。

「蘆庵と君平」、『文芸世紀』一二月。

昭和一七（1942）年 四五歳

六月、『女流十人歌集』富士書房刊の編者となる。八月六日、神戸を出帆、満州国立建国大学講師として新京に向う。十一月、新潟高等学校教授ヤコブ・フィッシャーの訳により独語版『天の夕顔』を出版。

「気質と世界観」、『文芸世紀』一月。

「雄渾の構想」、『新潮』一月。

「金に対する観念」、『文芸世紀』二月。

「南船北馬」、『文芸世紀』三月。

『愛の意味』、錦城出版、四月。

「『する』かも」、『文芸世紀』五月。

「世界の前途と経倫」、『文芸世紀』六月。

「旅人椰子」、『婦人倶楽部』六月～一八年六月。

『定本万葉の精神』、国民社、六月。

「純粹なる魂」、『文芸世紀』七月。

『歌ごころ』、文園社、七月。

『香妃』、錦城出版社、七月。

「風土の理念」、『文芸世紀』八月。

「別離」（短歌七首）、『文芸文化』八月。

「報告的発想の歌」、『文芸文化』九月。

「芭蕉の伝統」、『文芸世紀』一〇月。

「大陸だより」、『コギト』一〇月。

「ある会場」、『文芸世紀』一二月。

昭和一八（1943）年 四六歳

五月、東京帝国大学講師方紀生の訳により、中国語版『天の夕顔』（天上人間）を錦城出版より出版。七月、徳富蘇峰より「天の夕顔」について書簡をもらう。一〇月一七日、暴徒に襲われる。同二九日、三度満州建国大学文学講座のため飛行機にて羽田を発ち新京に赴く。帰途、朝鮮

を廻って帰京。

「神宮御親拝」、『文芸世紀』一月。

『偶然の問題』、人文書院、一月。

『秘帖』、臼井書房、二月。

「運命と使命」、『文芸世紀』三月。

「ほととぎす啼くや」、『現代』三月。

「生と死に就いて」、『文芸世紀』四月。

『美貌の海』、国民社、四月。

「女童の歌」、『文芸世紀』五月。

「瀬戸内海」、『文芸世紀』六月。

「月読宮御遷宮」、『文芸世紀』七月。

「生産戦の基地—工作機械と軽金属工場—」、『文芸世紀』八月。

「思ひつきの欠乏」、『東京日日新聞』八月一五日。

「銅山と発電所」、『文芸世紀』九月。

「伏見博英伯を偲びまつりて」、『文芸世紀』一〇月。

『旅人椰子』、講談社、一〇月。

「空にゆく音楽家」、『文芸世紀』十一月。

昭和一九（1944）年 四七歳

七月二七日、再度右翼の襲撃を受ける。「天上人間」、北京にて映画化。

「平野国臣の歌」、『文芸世紀』三月。

「神洲不滅」（短歌八百）、『文芸世紀』四月。

「文芸上の新時代」、『文芸世紀』五月。

「二つの作品—富岡鉄斎の研究、天明—」、『文芸世紀』六月。

「マリアナ諸島」、『文芸世紀』七月。

「士気について」、『文芸世紀』八月。

「河野慎吾の歌」、『文芸世紀』九月。

『日本文芸論』、講談社、九月。

「美術について」、『文芸世紀』一〇月。

昭和二〇（1945）年 四八歳

三月、山梨県塩山町下於曾中村淳併方に疎開。

「神靈上にあり」、『文芸世紀』一月。

「戦争と文芸」、『文芸世紀』二月。

昭和二一（1946）年 四九歳

『文芸世紀』が一月号にて終刊。藤田嗣治との往来頻繁となる。

「唯美の系譜」、『文芸世紀』一月。

『天の夕顔』、日本書林、三月。

『天の夕顔決定版』、双山社、一〇月。

昭和二二（1947）年 五〇歳

『逢ひし日頃』、民風社、二月。

『綺楼奇譚』、民風社、八月。

昭和二三（1948）年 五一歳

四月、幹子、共立女子大学国文科の教授となる。八月、阿部豊監督、高峰三枝子、藤川豊彦の主演で「天の夕顔」新東宝にて映画化。但し、原作者の名前を画面より削られる。

「三色堇」、『平凡』三～一二月。

『天の夕顔』、ロマンス社、三月。

『愛恋無限』、大有社、一〇月。

「恋愛小説論」、『現代文学講座第1巻』收、草原書房、一二月。

昭和二四（1949）年 五二歳

九月、英語版『天の夕顔』（A Moonflower in Heaven）、北星堂、太田朗訳。『アトリエ』九月号の企画する「デュフィ特集」は、中河所持の原画、画集によって編集された。

「脱走記」、『文芸』三月。

昭和二五（1950）年 五三歳

八月、読売新聞社主催世界美術展にラウル・デュフィの絵のうち素描を出品。

「むせぶ山脈」、『新婦人』一～一二月。

「小林秀雄に与ふ」、初出不明。

「美しき寝室」、『平凡』三月。

「失楽の庭」、『中央公論』六月。

『天の夕顔』、角川文庫、六月。

「逢はぬ恋人」、『ロマンス』七月。

「リボンの幻想」、『少女の友』七月

「日本人の徒党性」、『内外通信』九月一三日。

昭和二六（1951）年 五四歳

一月一日『ラマンチャ』創刊。八月六日、追放解除の通知を受ける。

「美しき墜落」（のち「墜落」と改題）、『婦人公論』五～七月。

「文芸理論の貧困」、『ラマンチャ』一二月。

『香妃・氷る舞踏場』、角川文庫、一二月。

昭和二七（1952）年 五五歳

七月一〇日、「悲劇の季節」完成。十一月、福田陸太郎訳の仏語版『天の夕顔』（Les Longues Annees）、パリ・ドノエル書店刊行。

「非合理の美学」（のち「偶然の美学」と改題）、『改造』三月。

「『異邦人』私見」（初出不明）、五月三日。

「なぜピストルを四発射させたか」、『机』五月。

『愛は惜しみなく与ふ』、長谷川書房、一〇月。

「『異邦人』について」、『朝日新聞』、一〇月一三日。

『悲劇の季節』、河出書房、一二月。

昭和二八（1953）年 五六歳

『天の夕顔』について、雑誌『ヴォーグ』は四頁にわたる紹介を、新聞『ル・モンド』ではロベール・コワブレによる批評を掲載。三月二日、「不条理の哲学」について、カミュに書簡を出す。これに対し同二〇日、『天の夕顔』についての書簡を受ける。四月一五日、仏訳『天の夕顔』および三部作完成の出版記念会を東京ステーション・ホテルにて開く。八月、根岸由太郎訳の英語版『失楽の庭』（The Garden Lost Joy）を北星堂より出版。一二月、ワキ方・下掛宝生流松本謙三の門に入る。

「実存主義」、『朝日新聞』一月一六日。

『むせぶ山脈』、長谷川書房、二月。

『失楽の庭』、河出書房、三月。

「三十年」、『東京タイムズ』三月二八日。

『愛恋無限（上）』、三笠文庫、四月。

「文学三十年」、『ラマンチャ』五月。

『愛恋無限（下）』、三笠文庫、七月。

訳註『伊勢物語』、角川文庫、七月。

「二つの世界—今日の文芸と絵画の科学と—」、『毎日新聞』七月三一日。

昭和二九（1954）年 五七歳

比較文学のマリウス・フランソワ・ギュイヤールにより「テール・ユメース」誌に『天の夕顔』の批評が発表。レーモン・クノーからミロのエッチングが贈られる。

「貞節といふもの」、『明暗』一月。

「短歌の新時代とその美学」、『短歌』二月。

「八つの問題」、『短歌』五月。

『悲劇の季節』、角川文庫、七月。

『非合理の美学』、（『偶然と文学』改訂版）、角川書店、七月。

「乱世の美学—能について—」、『毎日新聞』七月二三日。

「美貌」、『婦人公論』八月。

『失楽の庭』、角川文庫、八月。

「養女日記」、『小説新潮』九月。

『愛恋無限』、角川文庫、九月。

昭和三〇（1955）年 五八歳

五月、五浦の岡倉天心の旧邸を訪ねる。八月、聖ルカ協会理事となる。

『新恋愛論』、角川書店、五月。

『高原の少女』、角川書房、八月。

「青衣の木乃伊」（のち「ミイラ頌」と改題）、『新論』九～一〇月。

昭和三一（1956）年 五九歳

『左手神聖』、民族教養新書、元々社、三月。

『青衣の女人』（のち『ミイラ頌』と改題）、角川小説新書、四月。

「鎌吉詩歴」、『ラマンチャ』四月。

「探美の夜」、『主婦と生活』一〇～三四年二月。

「解説」、川端康成『虹 他五篇』、角川文庫、一〇月。

訳註『竹取物語』、角川文庫、一〇月。

昭和三二（1957）年 六〇歳

一〇月、癌の疑いにより診断を受ける。一月、毎日新聞社主催「花いっぱい運動」講演のため、水原秋桜子と共に長崎に行く。

『美貌』、講談社、三月。

「ブロッケンの妖怪」、『日本経済新聞』九月一三日。

「幻聴を聞く女」、『別冊小説新潮』一〇月。

『探美の夜』、講談社、一二月。

昭和三三（1958）年 六一歳

三月、被爆者福田須磨子の詩集『原子野』の出版を斡旋、現代社より刊行される。

「近代はもう終った」、『日本経済』一月一〇日。

「朝の言葉」、『毎日新聞・九州版』、三月一～一九日。

「漂白者」、『時の窓』四～一〇月。

『誘惑の谷』、東京第二書房、四月。

「生活は芸術を模倣する」、『表象』九月。

『続探美の夜』、講談社、一二月。

昭和三四（1959）年 六二歳

一月三十日、全国日本学士会よりアカデミー賞をうけ、その名誉会員に推される。二月日本山岳会の会員となる。

『愛の漂白者』（『漂白者』改題）、角川書店、七月。

『探美の夜・完』、講談社、一二月。

昭和三五（1960）年 六三歳

五月五日、水道橋能楽堂にて米川正夫と共に「松風」を演じる。

『新恋愛論』、角川新書、九月。

「歴史の運命」、『産経新聞』十一月一日。

昭和三六（1961）年 六四歳

五月五日、水道橋能楽堂にて「鉢の木」を演ずる。七月二〇日、NHK地方番組にて「四国の顔」として、生涯の記録を放映。

「文芸時評」、『東京大学新聞』五月一七～六月七日。

「一冊の本」、『朝日新聞』七月九日

『探美の夜』上下巻、角川文庫、十一月。

「鏡に這入る女」、『朝日新聞』一二月三〇日。

昭和三七（1962）年 六五歳

八月五日、富山大学教授植木忠夫の熱意により、薬師岳有峰湖畔の大和田峠に「天の夕顔」の碑建立。一〇月二二日より一週間、名作文庫として「天の夕顔」をフジテレビより井上孝雄、八千草薫出演にて放映。

「三人姉妹」、『ドレスメーカーキング』三～一二月。

『近代はもう終った』、雪華社、四月。

昭和三八（1963）年 六六歳

七月一四日、フジテレビより「三人姉妹」を河内桃子主演にて放映。

『三人姉妹』、集英社、二月。

「運命」、『文芸朝日』六月。

限定版『天の夕顔』、角川書店、六月。

「三つの都会」、『朝日新聞』一〇月八日。

昭和三九（1964）年 六七歳

五月五日、水道橋能楽堂にて米川正夫と共に「紅葉狩」を演じる。十一月七、八日、淑徳学園創立記念祭にて「『天の夕顔』を中心とする中河与一展」を開催。十一月より一ヶ月間、NHKラジオドラマで「愛恋無限」が放送される。

「人間の小説と運命的小説」、『ラマンチャ』三月。

「ガスパリニのサロン」、『朝日新聞』三月二〇日。

「エベレストへの思慕—不屈の精神と人間能力—」、『あざみ』八月。

「山霊」、『岳人』一二～翌年三月。

「マハーバリプラム」、『山陽新聞』一二月二日。

昭和四〇（1965）年 六八歳

四月一〇日、「天の夕顔」をフジテレビより新珠三千代主演にて放映。五月六日、中河所蔵の絵画を横山画廊にて展覧。五月二二日、母校丸亀中学校七〇周年記念に津島寿一と共に出席。十一月、TBS番組審議会委員となる。

「ブエンセンスラウ・モラエス」、『自由』七月。

昭和四一（1966）年 六九歳

一月一五日、水道橋能楽堂にて「鉢の木」を独吟。三月、松本謙三重要無形文化財保持者の認定を受ける。一〇月、『中河与一全集』（全一二巻、角川書店）刊行。それを記念し、日本橋三越に於て「作品を中心とする中河与一展」開催。二三日、その出版記念会を三越本店不二の間で催す。一二月、ハンブルグ大学オスカー・ベンル教授の独語版『天の夕顔』が「千年来の日本の愛の物語」の一篇として刊行される。

「さまさまの女」、『経済往来』七～一〇月。

昭和四二（1967）年 七〇歳

六月一三日、東京丸亀高等学校同窓会長に推される。

『天の夕顔・失楽の庭 他一篇』、旺文社文庫、五月。

昭和四三（1968）年 七一歳

五月二八日、日本ソノサービスセンターの企画により京都貴船にて保田与重郎と対談。九月一九日、関西テレビの橋本隆亘「愛恋無限」を「黒い髪の智子」と改題、十一月八日から翌年三月二八日まで放映する契約をする。一二月八日、京都霊山観音境内における大東亜戦争韓国人犠牲者の供養塔除幕式に参列、塔の背面に「とつ国の人なりながらこの国の柱となりて散りし君はも」の一首を献じ刻される。

「稻荷山摘記」、『朱』三月。

「富士と三つ峠」、『山と溪谷』三月。

「わが心の風土」、『読売新聞』三月二一日。

「藤田画伯のことども」、『更生保護』四月。

「平野謙に一言」、『新文明』十一月。

「世界の王宮」、『新生』十一月。

「わが青春の記」、『理想世界』一二月。

『愛恋無限』、日本ソノサービスセンター、一二月。

昭和四四（1969）年 七二歳

一月、保田与重郎との対話集『日本の心』、日本ソノサービスセンター刊行。
「昭和元禄を働こう」、『新生』一月。
「国語問題の意味するもの」、『国民協会新聞』三月一日。
「阿蘇山覽古」、『民友』三月。
「西洋と東洋」、『自由』五月。
『万葉の精神』、歴史文庫、五月。
「平野謙にもう一度」、『果樹園』五月。
「ネパールの印象」、『サンケイ新聞』五月一七日。
「悟達の笑ひ」、『芸術生活』六月。

昭和四五（1970）年 七三歳

年末よりネパール・印度旅行の記録に熱中する。
「カトマンズ見聞」、『北海道新聞』一月。
「聖地ベナレス」、『北日本新聞』一月二一、二五日。
「ところどころ」、『月刊ペン』四月。
「カイラース巡礼」、『旅』四月。
「坂出市」、『太陽』四月。
『ネパール・印度』、読売新聞社、一〇月。

昭和四六（1971）年 七四歳

二月、TBSテレビ「親父と娘」に出演する。五月、右文書院より『中河与一研究』刊行。九月二五日、岐阜県神岡町森茂中島平に「天の夕顔」碑建立され除幕式に参列。それに先立ち二三日、岐阜市護国神社に於て「私の文学遍歴」。二四日、神岡町にて「天の夕顔」についての講演を森安理文と共に行く。
「汎神論の世界」、『国民協会』一月。
「雪に飛ぶ鳥」、『月刊ペン』一一～翌年五月。

昭和四七（1972）年 七五歳

『森林公園』、雪華社、二月。
「思ひ出の風景」、『文学の旅15・四国』、千趣会、二月。
「久野豊彦の記憶」、『久野豊彦先生追悼集、すみれの花』、名古屋商科大学演劇部、六月。
『中河与一代表短編集』、読売新聞社、八月。
「小柿の苗」、『柳田国男回想』收、筑摩書房、九月。
「松原さんを思いだしながら」、『松原寛』、日本大学芸術学部、一一月。

昭和四八（1973）年 七六歳

一月二九日から二四日、新宿小田急百貨店にて「喜寿記念第一回書展」を開催。八月六日、ヨーロッパ旅行に一人で出発、エーゲ、アドリア海を航海。カンヌに木村忠太を訪問し、ドイツを廻って九月七日帰国。十一月、丸亀高等学校八〇周年記念に出席、講演。

昭和四九（1974）年 七七歳

一月二五日から三〇日、新宿小田急百貨店に於いて「第二回書展」を開催、今東光が賛辞を寄せる。六月三〇日、国学院大学にて講演。八月、幹子、短歌新聞社より歌集『悲母』を出版、その「序」を執筆する。十一月二日、狛江市福祉会館にて講演。一二月、幹子、紫綬褒章を受ける。

「アドリア海から」、『をだまき』一月。

「ゴッホの浮世絵」、『をだまき』三月。

「身辺語録」、『をだまき』四～五一年八月。

「木村忠太の世界」、『絵』四月。

『鏡に這入る女』、旺国社、九月。

「川端康成との交遊」、『山の音』、旺文社文庫、十一月。

昭和五〇（1975）年 七八歳

三月一六日、「かっぱ村」発足、村長に推される。五月、伊豆大仁町田中山に幹子の歌碑建立、その除幕式に参列。七月、『法政通信』の企画で「人と芸術」について学長中村哲と対談。九月二七日、国学院大学に於ける「芸術至上主義文芸研究会」第六〇回大会で「伝統の美学」についてを講演。十一月二日、高松市文化センターに於て講演。この年にゼレミーインガルス訳『天の夕顔』がシカゴのツワイン社より出版。

「昭和五十年と私」、『自由』三月。

『雪に飛ぶ鳥』、読売新聞社、三月。

「木村忠太展によせて」、『絵』六月。

定本『天の夕顔』、雪華社、一〇月。

昭和五一（1976）年 七九歳

菊地亘によるスペイン語版『天の夕顔』出版。五月二日、NHKテレビ「かっぱ村一年」に出演。六月一日から二〇日、名古屋の美樹邑画廊にて書展を開催。九月二日、上野美術館に於ける「東京展」に書を出品。一二月三日、勲三等瑞宝章を受け、九日宮中に参内。

「佐伯祐三という画家」、学研美術全集『佐伯祐三』收、七月。

『好きな画家との出会』、読売新聞出版部、九月。

『中河与一全歌集』、五月書房、一〇月。

『探美の夜（上）』、港リサーチ、一〇月。

「雨嘯嘯」、『一冊の本』收、雪華社、十一月。

『探美の夜（下）』、港リサーチ、一二月。

昭和五二（1977）年 八〇歳

二月、若林司朗手造り家蔵本『秘帖中河与一歌集』を二〇冊限定として和紙三彩により製本、市販せず。四月二九日、坂出市砂弥島に谷口吉郎により「愛変無限」の碑建立、記念講演を開催。六月一八日、『をだまき』主催の「ヨーロッパ詩歌の旅」に参加。ミュンヘン、インスブルグ、フッセン、ハイデルベルグ、フランクフルト、ローマを廻って三〇日帰国。一二月二二日、霊山観音に韓国人の遺霊碑を築く。一二月一日、日本ペンクラブ代表としてシドニーの国際ペン大会に出席。オスロールームで「東洋と西洋のかけ橋」を講演し、キャンベラを訪問。

「京都の正月」、『をだまき』一月。

「山・山・山」、『現代林業』一月。

「山登りと人生」、『をだまき』三月。

「雪山の魅力」、『現代林業』三月。

「純文学と大衆小説」、『をだまき』四月。

「燕・大天井・槍」、『現代林業』四月。

「玩具の時代」、『をだまき』五月。

「立山登頂」、『現代林業』五月。

「除幕式」、『ラマンチャ』月報、五月。

「地球の危機に於て」、『をだまき』七月。

「北岳登攀」、『現代林業』七月。

「折口学との交流」、『折口学と近代Ⅲ』八月。

「かっぱの起源」、『かっぱ村公報』八月。

「八甲田山」、『現代林業』八月。

「開聞岳」、『現代林業』九月。

「今東光の死」、『大法輪』一〇月。

「九重山群」、『現代林業』一〇月。

「石槌山登攀」、『現代林業』十一月。

「撫訓三章」、『民友』十一月。

「早池峯」、『現代林業』一二月。

昭和五三（1978）年 八一歳

三月一日、第四郎、坂出市立病院にて糖尿病のため死去、七五歳。三月一三日、金沢社会教育センターにて講演、鏡花、秋声、犀星の文学碑を訪問。四月二六日、次弟憲吉、国分寺の自邸にて脳溢血のため死去、七九歳。四月一二日、NHKの一〇二のテレビ番組にて斎藤季夫と「文学について」対談。四月三十一日、『中河与一歌論集』を古川書房より出版。五月一八日から二二日まで、八王子大丸で「中河与一・幹子二人展」を開催。七月二五日出発、アメリカ、メキシコ、カナダを廻り、八月一八日帰国。

「シドニー紀行」、『味の手帖』四月。

「不確実性の問題」、『談話室』六月。

「佐伯祐三の生涯と仕事」、『朝日グラフ』六月。

「佐伯祐三との出会い」、『東京国立近代美術館ニュース』八月。

「足と煙草」、『新潮』九月。

「昭和十六年十二月八日」、『談話室』一二月。

「アメリカを旅して」、『埼玉新聞』一二月五日。

昭和五四（1979）年 八二歳

一月一日から一六日まで、京都大丸にて書展をひらく。三月一五日、笹淵友一編による『中河与一研究』の二冊目を南窓社より出版。一二月四日、塩尻の高ボッチに歌碑建立。

『誰れも書かないから僕が書く』、青春出版社、一二月。

「荷風百年」、『日本経済新聞』一二月。

昭和五五（1980）年 八三歳

六月二日、自由のための文学碑を高松市図書館の庭に建立。一〇月二六日、幹子骨折、肝硬変にて河田町女子医大病院にて死去、八五歳。一二月、岡山県瀬戸町にゆき講演。

昭和五七（1982）年 八五歳

九月二六日、帝国ホテルにて蒲生久仁子との結婚披露宴。

「再婚の記」、『婦人公論』一二月一五日。

昭和五八（1983）年 八六歳

八月八日、札幌に行き九日より札幌の東急デパートで書展を開く。

「デュフィの絵」、『毎日新聞』四月。

「超一流の人々」、『新生』一〇月。

「ボードレールの生涯」、『週刊ポスト』一〇月一七日。

「ロマン主義の系譜」、『世界日報』一二月。

昭和五九（1984）年 八七歳

自叙伝『天の夕顔前後』に着手。五月、「藤田嗣治とエコール・ド・パリ」の著述に参加、ノベル書房より出版した。六月八日、下諏訪に於ける武井武雄遺作展を見にゆく。

「南禅寺風物詩」、『新生』一二月。

昭和六〇（1985）年 八八歳

二月末、大阪大丸、梅田デパートにて米寿記念書展を開く。「文芸広場」一月号から四月号まで、新感覚派につき、また今後の文学について安芸由夫と対談。瀬戸大橋の完成、その終点、

坂出市砂弥島には中河の歌碑二基あり。

「良寛の生涯」、『世界思想』一月。

「瀬戸大橋への期待」、『正論』三月。

「八百年の都還」、『世界思想』七月。

昭和六一（1986）年 八九歳

「日本及日本人」、『実朝』一月。

「保田与重郎」、『月曜評論』一月六日。

平成四（1992）年 九五歳

小田原松永記念館にて「中河与一寄贈コレクション展」。

平成七（1994）年 九七歳

一二月一二日、死去。

中河与一年表

<http://p.booklog.jp/book/76235>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/76235>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/76235>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ